

長岡市山古志地域での交流の特徴 — その類型と今後の進展 —

プロジェクト2 地域産業研究グループ 客員研究員
一級建築士
仁瓶 俊介

はじめに

(摘 要)

本稿は長岡市山古志地域での交流の特徴を報告するものです。その特徴を示す類型は3種類あります、観光・観光交流融合型、地元の生活文化発信型、復興の経験交流型です。交流活動は地域マネジメントの実践に寄与している事、多くの人による交流は元気取り戻しの点で社会的支援である事が考察されます。今後の交流の進展の重要点は、地域マネジメント分野での実践と社会的支援分野での循環する諸活動であります。

(キーワード)

交流の特徴、地域マネジメント、社会的支援、

(本稿の背景等)

山古志での交流に関してこれまでに、2008年度；農家民宿など、2009年度；農家等民泊、2010年度；都市農村交流、と題してその調査研究の結果を報告しました。これらを後読みしたところ、個々の事例の報告に限定されており交流全体を俯瞰する面が不足していました。交流の今後の進展を考察する場合、基軸となる底流及び全体像の把握が必要になると考えられます、これが本稿の背景となっています。従って最終年度の2011年度の調査研究の報告では全体像等を把握する為に、展開されている事例群を再整理し仮定の類型や分野の設定を通して、その特徴を把握し併せて今後の進展を考察することを目的としています。その為の方法として、

前年度までの調査結果と報告書の再整理、現地でのヒアリング調査、地元新聞の報道記事の整理、参考文献等の再読、研究会での協議等を進めました。この場合の視点として、①社会現象の視点、②経済活動の視点、③復興まちづくりの視点、④その他の視点があると考えられます。本稿では、社会現象の視点からは「社会的支援」、復興まちづくりの視点からは「地域マネジメント」に焦点をあてて交流の影響や効果などを考察しています。その為に地域の実態を示す、事例や他著の引用及び写真を多く用いています。

1. 観光・観光交流融合型（交流）

山古志地域での「交流及び交流活動」の展開を観察・調査した場合、その周辺領域にある「観光」及び「観光交流」による影響と関連には強いものがありました。展開されている交流の特徴とその類型には、観光と観光交流とが一体化・融合化・調和化していることを指摘したいと筆者は考えます。本章では山古志での観光・観光交流・交流をそれぞれの領域ごとにその事例等を整理してその関連、融合、調和性を概観します。

◎周辺領域の第一は「観光の領域」です。観光は「風光・景色・行事などを見物すること。sightseeing」とされるほか、「人々が自由時間（余暇）を使って、楽しむためのさまざまな行為（レジャー）のために、日常生活圏を離れ、移動し、行動すること。及び以上にかかわる様々な事業活動を含めたもの。場合によって

は、ツーリズムと呼ばれることもあります。」とされています。同時に日常生活圏の拡大等により、その概念は多様化すると考えられています。筆者は2011年8月23日に山古志体育館1階ロビーで開催中の「地域の宝 パネル展」を見学しました。これは長岡市地域振興戦略部の主催で8月13日から31日までの期間に行われたものです。テーマは「長岡市の各地域がこれまで培ってきた、地域固有の生活文化・地域資源である『地域の宝』を紹介」とされています。内容は合併後の長岡市内「10地域の宝」を写真パネルと観光パンフレットで紹介したものです。特に山古志地域に注目すると、「牛の角突き」、「錦鯉」、「棚田の風景」そして「アルパカ牧場」のパネル4点が掲示されていました。前の3点は伝統的地域観光資源、後の1点は被災後に加わったものであると筆者は考えます。また長岡市観光課（2010年9月）発行のパンフレット『長岡いろいろ』においては、「山古志地域は、美しい日本の原風景がそこに、勇壮な闘牛と錦鯉のまち」と紹介されています。そのなかでは観光対象がA4・1ページに収められています、「自然：山古志の棚田・棚池、中山隧道」とも紹介してあります。いっぽう地元から発信されたものでは、山古志商工会・山古志観光協会（2010年8月）発行の『ここは遊心の理想郷 山古志』において、「牛の角突き」、「錦鯉」、「棚田」及び「アルパカ牧場」が大きく紹介されています。いうなれば「3点の伝統的地域・観光資源、1点の被災後からの地域・観光資源」あるいは「3点の伝統的観光資源、1点の被災後観光資源」と考えられます。山古志住民会議編集、2011年8月発行の『つなごう山古志の心：ありがとう月間・イベント情報（2011. 9/10～11/13）』によれば、（山古志みどころガイド）として、「前者3点の資源」に「中山隧道」、「古志高原スキー場」が加えられていますので、視点と区分によっては、5点の伝統的地域・観光資源になります。2009年11月開園の油夫・アルパカ牧場や2011年5月開園の種苧原・アルパカ牧場が、「後者1点の被災後観光資源」に該当しています。伝統的資源としては重複しますが、「中山隧道・古志高原スキー場」が加わり、さらに「虫亀の三味線石」、

「小松倉の大日如来像」、「木簞の諏訪神社樹林」、「大久保の桂の木」、「虫亀の三十三観音像」、「池谷の闘牛場」、「種苧原の四季の里・古志」等が加わっています。『2011年 やまこし ふるさとガイド』⁰¹⁾では「白髯神社の樹林」、「あまやちの池の伝説」、及び「14集落のこと、年中行事、伝統芸能など」が紹介されています。これらの以外にも地域資源、観光資源は沢山ありますが記載を省略します、地域のガイドブック、地元の人、山古志観光協会あるいは総合案内所「茶坊主」などの情報を活用していただくことになります。

旧山古志村の誕生は1956年3月31日です、2006年3月で立村50周年になり、その後長岡市との合併で2007年3月に閉村式が行われました。少し古い資料ですが、立村40周年記念である『1997,山古志村勢要覧（平成9年）』⁰²⁾によれば、1996（H8）年度の目的別観光客数は、*温泉：8,000人、*名所・旧跡・ハイキング：13,000人、*行事：50,000人、*産業観光：49,000人、*キャンプ：27,000人で、合計では147,000人になります。かなりの数の観光客であったことがわかります。最近の長岡市観光課の資料による地域の年度別合計観光客数よれば、*2001（H13）年度：141,900人、*2003（H15）年度：128,500人、*2004（H16）年度：データなし、*2005（H17）年度：10,500人、*2007（H19）年度：18,720人、*2008（H20）年度：32,090人、*2009（H21）年度：26,980人、となっています。因みに山古志サテライト総合案内所「茶坊主」を来訪した観光客系の人数は、2008（H20）年度：20,522人、2009（H21）年度：26,922人、2010（H22）年度：21,183人となっています。以上の数字から、当然のことですが被災直後の観光客は激減し、住民の帰村後は徐々に被災前の状態にもどりつつあることが窺えます。また総合案内所「茶坊主」が来訪者の間で徐々に知名度があがっていることも想像されます。前掲の『1997 山古志村勢要覧』の「STORIES」のなかでは、自然、産業・観光、歴史と項目別に記述されています、ここにある「産業・観光」は、先の目的別観光客数のところで登場した「産業観光」と連動しており、その内容は観光上の代表的なものとして、3点の伝統的観光資源＝「牛の

角突き」、「錦鯉」、「棚田」をとりあげています。これらは、地域の産業と密接な関係があり、それぞれに「畜産業」、「養鯉業」、「農業（水稻）」と深いつながりがあり、観光の背景に対応する産業があることが窺えます。一般に産業観光は「工場や牧場、農園など生産活動を行っている産業施設のうち、一般の人が自由に見学できるよう開放している施設や物産展示販売施設。産業遺産をその対象とする場合も含む。（欧米では工場観光、技術観光に限定される）」とされています。生産に供される産業施設に関しては一定の区域を設定して、事故防止の手立てを行い、案内者の誘導・解説のもとでの、見学・体験になると考えられます。「農業体験」という手法を除けば、1990年代から「産業観光」という概念で「農村体験」が存在していたことが考えられました。最近では各地で地元の産業人の「技（わざ）」の公開と観光客のわざ体験が、産業観光の鍵のひとつとして取り入れられています、伝統的な観光にもそれらの要素を加えていく方法があると考えられました。また3点の伝統的観光に関しては、沢山の解説図書がありますのでそれぞれの記述は割愛します。

「写真」は観光の情報発信において、大きな要素となります、山古志地域をフィールドとして活躍している写真家のひとりとしての片桐恒平氏に焦点をあてて報告します。2008年9月7日（日）・17：30から、BSN 新潟放送から放映された『再びの山古志で写す』では、「山古志は日本の原風景とも言われる棚田が広がり、日本有数の豪雪地としても有名です。闘牛が誇りで錦鯉に生きがいを感じるという山の人々の暮らしに魅せられて30年以上も山古志に通い、写真を撮り続けているのがアマチュアカメラマン、片桐恒平さん71歳です。」として紹介されました。以下番組のを録画内容からその一部を紹介します。「①山古志へ写真撮影で通うことになる発端は、1975年11月に偶然見かけた「豆落とし」という、乾燥させた大豆や小豆の鞘をたたいて中の豆を取り出す作業のシーンを撮影した時からだそうです。②片桐さんと山古志とのつながりのベースは、カメラと写真にあるとおっしゃっていました。③写真整理の

為に65歳からパソコンに挑戦したそうですが、2002年頃と想像されます、25年以上にわたる写真画像の蓄積は膨大なものと想像されました。④旧村民の生活に密着した撮影活動が紹介されていました。⑤2004年の中大震災での被災状況の写真は、だれかが撮っておかねばならないという気持ちから撮影したが、公開等は復興が進行した時になるだろう。⑥今後2008年の秋には目の手術の必要がある」。という内容です。その後手術されましたが術後の経過は順調で、それまで通りにお元気で撮影をされています。またこの番組を視聴したことがきっかけとなり、片桐さんには虫亀の「フォトルーム片桐」を紹介していただき、お邪魔して作品の一部を見せてもらうことができました。2009年秋には池谷にある山古志闘牛場の改修工事が完了しました、その工事に伴い闘牛場へのアプローチの緩い階段脇には、RC造立上り壁による「山古志メモリアルギャラリー」が完成しました。展示されている写真パネルのほとんどが、片桐さんが撮影したものでした、闘牛観戦の行き帰りにはその観賞を楽しむことができます。なお、山古志闘牛場の周囲にはブナ林が広がっています、4月下旬から5月上旬の若葉が芽吹いた時期の晴天時には萌黄色が青空によく映え、新鮮な気持ちになります。「ようやく雪が消えた、とうとう遅い春もやってきた」と強く実感されます。

「表1 各月の主な観光行事とイベント」は、観光パンフレット「ここは遊心の理想郷 山古志」の内容に、現地での見聞を加えて2011年10月現在での主な観光行事とイベントを各月毎に一覧としたものです。概ね2010年4月から2011年10月までの実績をもとにしています。被災後に新しく加わったものには「＊」印を付してあります、概ね5月、9月・10月及び12月に行われています。この表からは、被災前からの伝統的な集落行事や観光行事が多数あり、それらがイベント等の全体の基礎となっていることと共に、被災後のものは「復旧・復興の経験」を発信していることが理解されます。この表に表示できなかったイベントもありますので開催されるものは非常に沢山あります、さらに観光交流

■表1 各月の主な観光行事とイベント

各月	主な観光行事とイベント
1月	・さいの神（各集落にて14～16日）
2月	・古志高原スキー場スキーカーニバル
3月	・古志の火まつり（上旬）
4月	・若鯉品評会（中旬） ・錦鯉市場の開始
5月	・牛の角突き ・田植え ・（ありがとう広場）直売所まつり＊ ・山菜まつり＊ ・アルパカ牧場の開園＊
6月	・牛の角突き
7月	・牛の角突き
8月	・牛の角突き ・お盆行事（盆踊り等）
9月	・牛の角突き ・錦鯉田上がり品評会 ・越後長岡ツーデーマーチ「山古志ウオーク」＊ ・種芋原祭り ・稲刈り（9月下旬～10月上旬） ・体菜植え付け
10月	・牛の角突き ・錦鯉特設市場 ・ありがとう月間＊ （9月上旬～11月上旬まで） ・うたごえ喫茶イン山古志＊ （年度によっては、きのこまつり）
11月	・牛の角突き ・錦鯉品評会（各地区） ・錦鯉特設市場 ・産業まつり ・四季の山古志写真コンテスト
12月	・古志高原スキー場開き（下旬） ・クリスマスイルミネーション＊ ・除夜の鐘つき＊

（2011年10月：筆者作成）

上の直売所の開所等を重ねると、非常に多彩な展開が行われています。

◎周辺領域の第二は「観光交流の領域」です。観光交流は「人・自然・文化との交流を楽しむ滞在型余暇活動。tourism」とされています。山古志地域はおおむね中山間農業地域とされていますので、農村での観光交流ともいわれます。農村観光交流（農産物直売所、農家レストランなど）や農業・農村体験（教育体験旅行など）が行われています。社会の現象として記述すると、微妙な部分がありますがこの観光交流も交流に注目し

写真01 山古志闘牛場メモリアルギャラリー
（撮影：2011年9月）写真02 山古志闘牛場メモリアルギャラリー
（撮影：2011年9月）

た場合には交流の領域とも考えられます。都市農村交流という呼称にはこの間の事情があると考えられます。これまでの調査から、山古志での交流はおもに三種類の分野、①農、②地元宝物、③復興、で展開されると筆者は考えます。分野に応じてその内容や仲立ちとなるもの及びその特徴も違ってきます。

農業・農村体験の代表的事例：教育体験旅行事業は、被災後の2008年度から実施されています、規模的には大きいものではありません。2011年度の場合10月までの実績としては、6月に川口地域と合同で行われたも

ので、首都圏の中学生68人を2泊3日の日程で18軒の農家等で受け入れました。8月には長岡市内の小学生29人を2泊3日の日程で4軒の農家等で受け入れています。支所産業建設課の担当者のお話では、来訪宿泊した小・中学生からは良い評価をもらったそうです、この事業は今後も続けられるとのことでした。農村観光交流では地域内に12ヶ所ある「農産物直売所」、2008年12月開店した「農家レストラン：多菜田」、2009年10月から6店舗で一斉販売された「山古志弁当」、2009年11月に油夫で開園、2011年5月に種苧原で開園の「アルパカ牧場」、2008年秋から継続して開催されている越後長岡ツーデーマーチ「山古志ウォーク」などが展開・開催されています。観光交流上、滞在時間の短いものは「観光の領域」に分類される可能性もありますので、記載したものは混然一体的に融合している状態と考えられます。「①観光→②観光交流→③交流」という流れや概念上の分類があるとしても、分類や使い分けにこだわることもなく、事業等で説明する時にかぎりポイント等の置き方に応じて3種類を使い分ける対応がふさわしいと考えられます。

「地元宝物磨き分野」での観光交流は、特に地元の宝物の所在場所を探すことから始まると考えられます。『(2007) ふるさと山古志村に生きる』⁰³⁾において、民俗学者宮本常一は提案しています、そのなかの「第六話：模型づくりや文化財保存を通して山古志を知る」に関連した作品、「山古志地形模型」が山古志会館1階の多目的ルームにあることがわかり、じっくりと観察ができました。それは、若者グループ「ほおきんとう」が1979（昭和54）年から1984（昭和59）年までの5年間をかけて制作したもので、発泡スチロール板を積層した作品でした。「ほおきんとう」の元メンバーだった人達からのヒアリングや当時の資料等から、グループの概要も次第に詳しく判明してきました。人材も含めた地元宝物として報告します。1975（昭和50）年頃、山古志地域では若者グループをつくろうという動きがあったそうです、ほかの地域では「4Hクラブ」や「青年会」などのグループ活動があり、時代的にそのような気運があっ

た模様です。そのような背景のなかで、1977（昭和52）年、若者グループ「ほおきんとう」が設立されました。そのめざすところとしては、メンバーでダンスなど楽しいことをやろう、山古志村が元気になるようなことをやろう、というおおまかなものだったそうです。この設立には、当時の新潟県長岡農業改良普及所山古志支所（種苧原）職員の、山口孝平さん、渡辺孝寿さんも参加したそうです。当時の渡辺さんにとっては、就職後の初めての赴任地であり、集落内に下宿して職場に通勤したそうです。筆者には後読みのイメージですが、相当に張り切って仕事を進めていたと想像されます。渡辺さんは4年間の勤務の後、県内に異動転任になりましたが、後任は甲斐 稔さんとなり「ほおきんとう」にも参加されました。渡辺さんから提供された当時の資料によれば、*「ダンスパーティー：なんだこりゃ」、日時：1977（昭和52）年12月25日（日）；PM 01:30～04:30、場所：錦鯉研修所（上ばき持参）、主催：参加者全員、が「サークルほうきんとう」の結成後の最初の活動として開催されました。当時は他の市町村各地で青年団が冬になるとダンスパーティーを企画しており、ダンスを練習したそうです。*「納涼映写会：海のトリトン 黒い牡牛」、日時：1978（昭和53）年8月4日（土）・（午後）07:30～10:00、場所：池谷闘牛場（雨天のときは山古志中学校）、主催：サークルほうきんとう（会長：池谷 斉藤末松）が開催されました。16ミリ映画の上映会で、雨天の為山古志中学校でおこなわれたそうです。*1979（昭和54）年、1980（昭和55）年の2ヵ年には、村の農業委員会からの依頼で、「ほうきんとう」が企画した、名古屋市の紡績工場で働いている若い女性を招いた交流会を開催したそうです。*1981（昭和56）年の春に撮影された、制作途中の「地形模型」の写真は、完成程度70%くらいと想像されます、画面片方からの照明によって山々の陰影が表現されています。山襲が強調された写真です。同じ年の1981（昭和56）年に渡辺さんは異動転任になりますが、3月には当時山古志小学校から同じように異動転任となった深沢先生との合同送別会が行われました。その時の写

真によれば、ほうきんとうのメンバー、演劇の公演メンバー合わせて、約24名が集合していますが、当時の山古志村で頑張っていた若い人たちの大部分だったそうです。この写真には若さで澁漣としている様子がよく表れていました。この面々が、現在では現役最前線の働き盛りにあることから、山古志の元気につながる期待があること、当時の熱気を次世代に伝達する方法を模索すること、など「ほおきんとう活動の結果」はまだ昔の話ではなく、現在にも及んでいることを実感しました。1979（昭和54）年、地形模型の制作が始まりました。5年の歳月をかけて、1984（昭和59）年に完成、池谷の民俗資料館に陳列。翌年の1985（昭和60）年、竹沢の山古志会館へ移動しました。地形模型の制作はグループの活動成果のひとつです、その作品が「カタチとして残り」現在も鑑賞できることが「宝物」と考えられる所以です。この宝物を磨く手法はいくつも考えられますが、そのひとつが「(2011) つなごう山古志の心展」にも現れていました。同展は山古志会館1階で、期間が8月1日（月）から11月16日（日）までの長いものです、主催は山古志住民会議です。テーマ別に開催初日が変化しています、第1章：山の暮らし今昔・8月1日（月）から、第2章：中越地震・9月1日（木）から、第3章：帰ろう山古志へ・9月21日（水）から、となっています。このなかの「第1章：山の暮らし今昔・8月1日（月）から、」において先の『（山古志村）地形模型』と、2008年；長岡造形大学制作・中越防災安全推進機構所蔵の『山古志地域・地形模型』と見比べられる方式で展示されていました。最新の模型も非常に精巧で信濃川も表示され、中越地震の被災ポイントも明示された作品でした。筆者も見学し見比べました、制作の背景を考慮すると「甲乙つけがたい」印象があり、このような展示方式は「宝物の磨き方」のひとつの実例と考えられました。

1992（平成4）年頃まで、結成から15年間程度活動は続いたそうですが、メンバーはそれぞれ30歳代になったこともあり業務の多忙さや社会的責任、結婚や子育てなどがあって、その期間は特別に目立った活動は無

かったそうです。さらに時代が下ると40歳代に入ったこともあり、グループの主なメンバーがたまに集まり飲み会を行う程度だったそうです。2004年10月23日の新潟県中越地震の当日は、「今後の山古志を語る」目的で主なメンバーが集まる飲み会の開催予定日であったそうです、なにか運命的なものも感じられます。被災後はその主なメンバーも旧村民と同様に避難し、生活再建を進め仮設住宅生活等を経験した後帰村しての暮らしあるいは新しい居住地での暮らしを進めました。その後、ほおきんとうのメンバーだった人々を中心として、2006（平成18）年11月に、「NPO法人・よしたー山古志」が設立されました。山古志地域の復旧・復興と歩調をあわせて現在に到っています。宮本常一の著作が広く再読される現在において、期待される人材集団のひとつであると考えられます。人材的にも地元宝物である「ほおきんとう世代」の活動に期待しています。以上の内容は、2011年度の調査活動で判明したもので2010年度では報告ができなかった内容です。

以上、地域調査のむずかしさが実感されました。特に地域は山々が深いので現在では道路・トンネル・橋梁を経由してかなり自由に往来ができますが、それができない時代もありました。集落的にはそれぞれ独立性が強いという印象があります、情報の横流通を山々が妨げている部分があるかもしれません。また稲刈り前に水田から水を抜く時に放流していた錦鯉を水田から引き上げることを「田上がり」と言うそうですが、水位が下がってくると美しい姿が現れます。それと同様に山裾の深いところにある情報が、聞き取り内容の水位が下がってくるに従い詳しい姿が現れました。それまでの単発的な情報が横の繋がりをもって物語のように現れました、調査の結果でもあります。

◎以上が筆者の考える交流の周辺にある、観光と観光交流の領域です。これらを集合的にとらえ、農業をはじめとした産業（農の分野の産業）をベースとした産業観光の延長にある交流として、その特徴を示す類型を表現すれば、類型Ⅰ：観光・観光交流融合型（交流）、と考えられます。関連する内容と表現を記載すれば、

農産物直売所での（対話やふれあい等の）交流、農家レストランや山古志弁当による（味と会話の）交流、アルパカとの（動物ふれあいの）交流などがあります。この用語も多様な使用例があります、一般には「交流：違った系統のものが互いに行きかい交じること。ふれあい。コミュニケーションすること。行ったり来たり。やりとり。つながることを意味する場合もあります。exchange」とされています。筆者は「exchange」の場合、交換・両替の印象が強いので「共感する交流」の点から「rapport」も候補としています。ここまでに於いて、筆者の考える広義の交流のなかの「農の分野での融合型交流」を概観しました。特徴を示す類型としてはこのほかに、類型Ⅱ：地元的生活文化発信型（交流）と類型Ⅲ：復興の経験型（交流）が考えられます。

2011年3月10日までは、単純に「被災地視察交流」ともいえる事例であった、中越防災フロンティア主催の「被災地視察会」です。道路等の社会基盤の復旧の過程でもある、2006年度から始まっていたものです。この視察会の目的は「被災体験、防災情報の伝達、復旧・復興の現場の体感」となっています、主な視察地点としては「棚田復旧現場」、「竹沢・復興公営住宅団地」、「国道291 復旧：山古志トンネル」、「芋川・河道閉塞復旧：新宇賀地橋・木簗橋」などです。現在では「復興の経験交流」型に移行しています。復興の経験をベースとした「被災地間交流」ともいわれる東京都三宅村（三宅島）との交流があります。これは中越地震直後の2004年に、平野祐康：三宅村長が激励に訪れたことから始まったものです。2011年秋には油夫の「三宅島の田んぼ」からの新米が同村へ送られました、詳細は「第3章：復興の経験交流」で概観しています。

このほかに「2007年：能登半島地震応援ツアー」、「同年：中越沖地震刈羽村炊き出し支援」など、山古志からの復興の過程での応援・支援の交流が行われていました。2011年3月11日発生；東日本大震災、同3月12日発生；長野・新潟県境地震を契機として、この分野での活動も多くなってきました。山古志地域からの支援・応援の、大きな傾向としては3月の東日本大震災被災

地への支援物資搬送、4・5月の長岡市内避難所での炊き出し支援がありました。同時に2011年3月の長野県栄村からの山古志地域視察、同年7・8月の宮城県石巻市雄勝町からの長岡市及び山古志地域視察がありました。このように復興過程の経験がベースとなっている支援・視察も進行しています、山古志からの支援には「恩返し」が合言葉になっていました。

交流活動に関する諸点に進みます。社会現象の面だけの理解では今後の進展を考察する場合、困難も伴います、従って交流活動をその観察結果から分類したものを記載します。①課題に直接的に労力を提供するもの。②課題に間接的に助言を行うもの。③上記が混合したもの。④交際や親交等に分類されるもの。⑤物資等の提供等に分類されるもの。⑥その他のもの。があると考えられます。＊学生ボランティアによる集落活動の支援は「③」に、＊地域外住民等による農業応援等は「①」に、＊地域イベント参加者による地域応援等は「⑥」に、それぞれ該当すると考えられます。

交流上は、「④交際や親交等に分類されるもの」や「⑥その他のもの」に該当するものが件数としては多いと考えられます。「⑥」に該当するもので地元宝物の分野などで展開される、「地元的生活文化を仲立ちとした交流活動」についてその特徴と類型を次の「第2章」で報告します。

2. 地元的生活文化発信型（交流）

交流上の大きな要素である産業の次に位置するものは、その産業を支えている「生活や生活文化」であると筆者は考えます。この領域には歴史的な経緯や遺産も含まれ非常に広範囲に及んでいます。「生活文化」が交流上の大きな要素であること、特徴の類型を構成していることは充分承知しています、しかし領域があまりにも広いのでその全体像までの記述はできていません。実際に取材できた事項と聞き取り等ができた範囲に限定して、生活文化のいちぶとして報告します。事

例の収集の範囲と結果から、下記の順序でその内容を概観します。1) 和太鼓演奏と民具・古文書等、2) 山菜等の栽培、3) 山古志の豪雪、4) 山古志の山や川の名称など、以上がこの報告の細目です。

3-1) 和太鼓演奏と民具・古文書等

【和太鼓演奏】

地域には「山古志子ども太鼓会」があります、日常の活動として、毎週月曜日の夜に練習しています。この会のメンバーは14名、小学校2年生から中学校3年生までの学年に広がっています。子供達の練習が終わると、保護者を中心とした大人達の練習が始まります。

この子ども太鼓会は、2009（平成21）年度に「山古志伝統芸能継承事業」として、長岡市地域コミュニティ事業の交付団体でもありました。筆者は、2010年10月の「ともしびコンサート」のオープニングで「子ども太鼓会」の演奏を初めて聴くことができ、腹に響く迫力に圧倒されました。その後各地で和太鼓の演奏や共演による交流、東日本大震災後に被災者を励ます演奏活動があることがわかりましたので、山古志地域での演奏活動等の実際については山古志支所教育支援係の松田淳氏からのヒアリングと資料提供を頂きました。2010（平成22）年度の行事参加（公式演奏）報告を「■表2」にしています。この表からも読み取れますが、11月上旬の「産業まつり」、12月上旬の「越後長岡・和太鼓祭」、年明け3月上旬の「古志の火まつり」での演奏は毎年の恒例行事です。

12月上旬の「越後長岡 和太鼓祭」は共演であり競演でもあると思います、演奏を通して長岡市内の各地域との交流も想定されます、さらには市外の地域での共演や競演を通して「音楽的激励」や「和太鼓交流」が期待されるところです。同時に今までの行事参加（公式演奏）の記録整理などを通じて、広報・発信も期待されます。保護者の熱心な応援と協力があって活動が行われているとお聞きしました、この活動は次世代伝承型でもあったと考えられました。関連して「大人の部」は、子ども達の父兄（特にお母さん達）を中心として、「山

■表2 2010（平成22）年度 行事参加報告（一覧）

月 日	イベント名 および（場所）
4月26日	子ども太鼓会結団式（山古志体育館）
7月24日	川口まつり（川口支所前）
9月18日（土曜日）	(2010) 越後長岡ソーデーマーチ・山古志ウォーク（山古志地域）
9月26日（日曜日）	日本のまつり・ふるさと新潟2010（新潟市産業振興センター）
10月 2日	第9回 米百俵まつり（長岡駅前）
10月 9日	ともしびコンサート（山古志体育館）
11月 3日	産業まつり（種芋原会場：四季の里）
12月 5日	越後長岡 和太鼓祭2010（ハイブ長岡）
3月 6日	古志の火まつり（種芋原：四季の里）

（資料提供：山古志支所地域振興課教育支援係）

古志太鼓会」を立ち上げ練習等の活動を行っています。大人と子どもが一緒に演奏する時に、この山古志太鼓会の名称を使うこともあるそうです。以上演奏する団体についておおまかに概観しました。

『闘牛太鼓』は演奏する曲目群の名称のことですが『せぶみ・出陣・対戦・凱歌・横綱』の5曲で構成されています、1983（昭和58）年、新潟県湯沢町在住の阿部清さんから作曲してもらったとお聞きしましたが、国の重要無形民俗文化財に指定されている『牛の角突き』から作曲されたそうです。「地域名とこの曲目名とを合わせて『山古志闘牛太鼓』とよばれる場合もあります。1983（昭和58）年の作曲以降、『鼓龍会』という団体が演奏していたそうですが、新潟県中越地震による団員の引越等により解散されました。その後2005年に『山古志子ども太鼓会』が結成されました、中越地震の復旧・復興を目指して、山古志の子ども達が元気に演奏している姿が地域の活性化につながればという気持ちから始まり、それが目的になっています。そして現在もメンバーの子ども達は多くの支援に感謝の気持ちを伝えたいという気持ちで、いっしょうけんめいに練習に打ち込んでいます」とお聞きしました。和太鼓演奏の練習や活動への熱意がよくわかりました。

『2005,太鼓という楽器』⁰⁴⁾に、浅野太鼓文化研究所理事長の浅野昭利氏の「発刊のごあいさつ」がありますので一部引用します、「日本で初めての太鼓専門情報誌

『たいころじい』を創刊したのは、1988年だった。その17年前、1971年に田耕氏が佐渡島で太鼓集団『鬼太鼓座』を旗揚げして以降、「コンサート形式で和太鼓を演奏する」という新しい形での太鼓演奏スタイルが急速に広まった。その後『鬼太鼓座』は分裂したが、その座員らで結成した『鼓童』や初の太鼓ソロリストとなった林英哲氏をはじめとする多くの太鼓演奏者によって和太鼓が目ざましい進展を遂げてきた折、ようやく芽ばえた『太鼓文化』という言葉を活字によって実体あるものとして社会に残したいとの思いが、私を未知の『出版』という冒険へと駆りたてたのだった」とありました。2011年10月現在、全国的に地域の地名や地元の特徴を名前に反映させた演奏団体があり、演奏会などの共演を通して交流を深めています、子どもと大人を合わせた「山古志太鼓会」の活動は、今後も非常に期待されるものです。

【民具・古文書等】

山古志会館で、2011年8月1日（月）から11月13日（日）までの期間、「つなごう山古志の心展」が開催されました。そのなかの「第一章：山の暮らし今昔」では多目的ルーム内で、民具の展示も行われました。筆者の記憶では、「養蚕関係のもの：糸車など」、「錦鯉の運搬関係のもの：桶など」が展示されました。これらの民具は、旧虫亀小学校校舎に収蔵・保管されています。筆者は同年6月に短時間ですが見学できました、田植え用民具、錦鯉運搬用民具（ナガテ）、苧麻用民具（オオヨリグルマ、オボケ）などが、スチール棚にタグ（荷札）付きで整然と収納されていて、いずれこの建物が、民俗資料・民具収蔵施設になるのではないかと考えられました。同展の開催中、9月23日に山古志公民館等主催で第5回・山古志の歴史を語る会が開催されました。記念講演「坂牧善辰と漱石・山古志」が滝沢繁氏を講師として行われ、同時に特別展示「坂牧善辰と夏目漱石」として、坂牧善辰宛の夏目漱石書簡や坂牧家文書が一般公開されました。筆者は特別展示だけの見学でしたが、内容に関してはよくわからなかったのが実情でした。翌24日から30日までの期間は、多目的ルームで先の特別展

示が行われました。長岡市立中央図書館文書資料室・8月1日発行『長岡あーかいぶす』によれば、この展示を遡った、「6月25・26日（土・日）、旧種苧原小学校校舎で、新潟歴史資料救済ネットワーク等の主催により、長岡市資料整理ボランティアの方々等の参加で文書資料整理や古文書閲覧などが行われました、延べ74人が参加」と報告されていました。

山古志支所教育支援係の斉藤末松係長からのヒアリングによれば、8月30日・31日及び9月1日の期間、新潟大学人文学部民俗学研究室では博物館学実習として、この地域で民具の調査・記録・研究を実施しました。継続して行われているこの調査は、民具類の整理と陳列にも進み、そこから先人の暮らしの知恵が具体的に学習できる可能性があり、歴史的な使用の変遷が物語りとして見学者に伝達されます。旧虫亀小学校校舎は民具系であり、旧種苧原小学校校舎は古文書系の収蔵・保管施設でもあり、公民館分室としても利用されていることも判明しました。同時に民俗資料等に関する整理については、新潟大学人文学部民俗学研究室、新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野および新潟歴史資料救済ネットワークを中心としたグループの活動が大きいこともわかりました。整理作業への参加には制限もあると考えられますが、その関連作業への参加などを通じた交流についても今後の展開が期待されます。この分野に関連するものとして昔話や民話があります。新潟県民俗学会理事・漫画家の高橋郁丸（たかはしふみまる）さんが、『2011,新潟の妖怪』⁰⁵⁾のなかで山古志に伝わるものとして、イラストと共に紹介している『天狗の石ころがし』（石がころがるような音がするが、実際には何もない。天狗が起こす現象）、があります。これは防災に関するものかもしれないと考えられました。しかしこれだけだとあまりにも短いので、お話の重みや物語性が伝わってこない懸念がありますので、例えばテーマを設定して以上のような昔話などを地元の人から聞きとるというスタイルの交流も考えられました。下調べですが、地元の地域での昔話等は『1983, 山古志村史・民俗』⁰⁶⁾にも記載されています、同書に

は昔話として約30話、伝説として約10話、世間話として約12話が記載されています。さらに『妖怪』として「猫又」が紹介されています、解説によれば「猫又は広神村の権現堂からやって来るといふ。葬式の時に来て、棺を開けて死体を持ち去り食べてしまうとされている。この妖怪は村全域で聞くことができる」とありました。「猫又沢川」の名前との関連などについては不明ですが、漢字でのつながりがあるので連想や空想へ拡がり、地域の奥行きへの理解にもつながります。民話採集者・水沢謙一は『1978,あつたてんがな』⁰⁷⁾のなかで概ね1970年代前半に旧山古志村で採集したもの10話を紹介しています、その題名群は「風と神と子ども、宝ゲタ、ぼっこれ碗、火玉、ツルとカメ、三枚の札、ウサギとムジナ、カエルかか、かかのけつの三つイボ、アブと娘」などです。このなかの『ツルとカメ』は、山古志村虫亀・長島ツルさん・92歳（1957年採集）からのお話で、解説によれば「(とんと昔があったけど。)一本の棒をツルとカメが啜えて、しゃべるなという条件に、空へまいあがっていく。しかしカメがしゃべってしまい、下界へまっさかさまにおちる。」というお話です。最後に「いちごさけた、ドッペン。」が付きます、この意味は「一生安楽にくらした(一期栄えた)、全部ではらった(全部おはなしした)」です、口調の良さなどもおもしろい点です。

3-2) 山菜等の栽培

山古志地域では夏になれば、なつやさいの栽培が盛んです、カグラナンバン、巾着ナス、キュウリ、などなどです、秋以降食する食用菊；カキノモトなども栽培されています。ところで直売所には、春は山菜・秋はキノコが並びます。筆者の観察では、山菜栽培はあまり盛んとはいえない印象でしたが、2011年5月の地域産業研究グループの直売所視察によれば、種芋原の中野直売所近くではゼンマイ畑があり、栽培しているという報告がありました。ゼンマイ栽培には相当の努力が必要と聞いていましたが、すでに実行されていることがわかりましたので、今後はその普及に焦点が絞ら

れていくと考えられました。キノコ栽培は栽培者同士の交流を目的として始まったそうです。これら山菜やキノコの栽培は実行している人はしっかり実行していて、話しが広がっていなかったものと考えられます。またこのほかの山菜であるミョウガ、ノブキ（野蓴）などは毎年広く自生しているので、しばらくは絶える心配がないとされている印象もありました。

NPO法人「よしたー山古志」では、2009年から栽培地の整備を含めて、猫又沢川の北の方向にある、なだらかな南斜面を利用した「山菜農園」で山菜のヤマウドの栽培を進めています。2009年4月には栽培用畑地の整備を行いました、その面積約10㌦（約1,000㎡）。

2010年5月にポット苗の植付けを約300株、肥料を少々散布して豆トラで耕起、ヤマウドは水はけの良いところで良く育つので一本づつ丁寧に植付ける、その後水遣りも必要ですが、天気予報が雨ならば省略できます。2011年6月にも約200株のポット苗を植付けました。筆者は2010年と2011年に、猫の手として植付け作業に参加しました、作業への参加者が減ってきている傾向です。7月・8月に「よしたー」のメンバーが草刈り作業を行いました、筆者は9月に申し訳程度に草刈りをしましたが、雑草の繁茂にはかえりませんでした。大変な草刈り作業を除けば、栽培というより定植後の畑地管理が作業の要点です。〔1995,山うどの人工栽培法〕⁰⁸⁾によれば、7・8月頃に花が咲き、8・9月頃には集合果となり、その後完熟すると黒紫色の果実になり、その果実のなかに極小の種が入っているそうです。種には休眠期があり、そのため種から苗に育てるのが難しく播種から育苗は雪の影響の少ない場所が必要になるそうです、播種からポット苗程度に成長するまで150日程度必要とあります。この大変な作業を、元「ほおきんとう」のメンバーであった渡辺孝寿さん（現在・新潟地域振興局新津農業振興部普及課長）が自宅で行って、ポット苗までに仕立てたとお聞きしました。このように表面に表れてこない下拵えの作業は、今以上に広報される対象と筆者は考えます。



写真03 ゼンマイ畑（撮影：2011年5月 P2・清野隆氏）



写真04 ヤマウドの集合果（撮影：2011年9月25日）

現在この山菜農園では、ヤマウドの栽培だけですが余力があれば、「ゼンマイ」、「ワラビ」の栽培も考えられます、種芋原にはゼンマイ畑があり栽培もされているそうですのでいずれ挑戦することとして、ワラビが直近の栽培計画の対象と考えられます。その栽培については新潟県阿賀町鹿瀬地区と津川地区で実際に行われています、〔2007,わらび栽培マニュアル〕⁹⁹⁾ から栽培に関する事項を一部引用します。「ワラビは羊歯（シダ）植物で、地下茎である根茎からの新芽（若芽）を収穫する、そのとき葉が出たもの（展葉したもの）は収穫できない。収穫する若芽は、長さ30～35cm程度のもので手で摘み取る。収穫時期はおおむね4月下旬から5月中で、根茎の植付け後3～4年後の春からになる。根茎は自生地あるいは栽培圃場から採取して、秋10月から

11月上旬に種苗として植付ける。その後は雑草管理を充分に行う」とあります。最終的にはやる気の問題になりますが、適地はありそうなのでワラビ栽培も今後のテーマになると期待されます。

秋のキノコである、「マイタケ」栽培については山古志サテライトの渡辺友栄さんからヒアリングしました。

「山古志まいたけ」と命名してマイタケ栽培活動に取り組んでいるグループがあります。メンバーは桂谷、竹沢、小松倉、種芋原、梶金の各集落からの9人です。2010年度には、6月に合わせて約2,000個の廃菌床を植付けました。廃菌床とは一度施設栽培で収穫を終えたものの（培地）のことです。その収穫は10月初旬で、直売所へも出荷できる程度の収穫量があった模様です。収穫・販売が終わった12月上旬、メンバーで日帰りの研修会も行い相互の交流を深めたそうです。また栽培上の技術交流の為に文書も作成して相互に腕をみがいていました。その文書からの栽培上のポイントをおさらいします、定植後ブナの葉を厚めにかけておくこと。さらに遮光ネットを掛けること。9月20日過ぎには芽がでるので、朝・夕きれいな水をかける。場合によっては雨除けシートを掛けること。などが明示されていました。これらのポイントから栽培上の注意点や苦労する点などが想像されて、ほかの作物の場合も連想されました。（空調設備付）施設栽培で一度収穫が終わった後に派生される「廃菌床（培地）」は、ビニールの袋に入っていますが再度自然環境下でマイタケを発生させるという栽培法は地中埋設の有無で、有の場合「廃菌床の野外床栽培」と呼ばれ、無の場合「（廃菌床の）林内地上栽培」と呼ばれている模様です。山古志まいたけは、後者の栽培法と考えられました、年毎に収穫量が衰えますが2年目までは収穫できる模様です。またこの栽培では作業休止期間もあるわけですが、「年間の栽培暦」を作製して、春・夏のほかの栽培ものとのやりくりを明示することを期待しています。2011年度の「山古志まいたけ」栽培活動については残念ながらヒアリングはできませんでした。栽培上小規模のものでもそれに取り組む熱意に筆者は注目しています、特に「山

古志まいたけ」栽培活動では、活動に関する文書をまとめ栽培の技術交流を行っている点が注目されました。この公開された技術によって、新しく栽培に取り組む人達が出現することが期待されました。

3-3) 山古志の豪雪（2010年度冬期）

■表3 2010年度冬期の主な積雪量等の記録（cm）

月 日	山古志支所での積雪深等（特記事項）
12月15日	降雪：7，積雪：7（初雪）
12月16日	降雪：87，積雪：39（最大降雪：87）
12月31日	降雪：5，積雪：105
1月9日 （日曜日）	降雪：5，積雪：156 （種芋原保育園の積雪：190）
1月25日 （火曜日）	降雪：12，積雪：285 （種芋原保育園の積雪：343）
1月31日 （月曜日）	降雪：76，積雪：380 （種芋原保育園の積雪：430）
2月8日 （月曜日）	降雪：0，積雪：283 （種芋原保育園の積雪：334）
2月14日 （月曜日）	降雪：5，積雪：297 （種芋原保育園の積雪：343）
2月28日 （月曜日）	降雪：0，積雪：235 （種芋原保育園の積雪：285）
3月11日 （金曜日）	降雪：19，積雪：270 （種芋原保育園の積雪：315）
3月31日 （木曜日）	降雪：0，積雪：211 （種芋原保育園の積雪：264）

（長岡市危機管理防災本部：降雪・積雪定時報告から）

2010年度冬期（2010年12月-2011年3月）は、長岡市内および山古志地域では、2004及び2005年度冬期に匹敵する豪雪でした。詳細な積雪の記録は、長岡市危機管理防災本部の降雪情報URLに記録があります。その記録から主なものを「■表3」としました。筆者は、山古志支所建物の西側端部の観測地点にある降雪量計（午前9時までの24時間降雪量を計測するもの、雪板とも呼ばれる）や積雪量計（午前9時現在の積雪量を計測するもの、雪尺とも呼ばれる）にも注目していました。なお、12月15日から17日まで地域で研究合宿がありましたがその時にはもう初雪を記録していました。

詳細な降雪等は長岡市危機管理防災本部：降雪・積雪定時報告によります、それによれば今冬の最大積雪量は2011年1月31日時点で41cm前後となり、この頃がピー

クとなりました。筆者は1月9日と30日に、山古志サテライトを訪問しましたが30日はその途中、41cm以上の高さになっている道路の側面雪壁の異常な高さに恐怖感を覚えました、その日は道路除雪と共に電力架線の除雪も行われていました。この降雪・積雪定時報告から、2010年度冬期山古志支所での積雪25cm以上の日数を拾った結果、1/20から2/26までの38日間にもなりで1ヶ月を超える日々です、まさに「雪ごったく」（雪に関する様々な作業などのこと）が続き、豪雪の影響は非常に大きいものがありました。3月に入ってから断続的に降雪があり、3月10日から12日の研究合宿では、車の屋根雪を払ってから乗車・移動した記憶があります、晴天となっても積雪の影響は残ります。3月末になっても積雪量は21cmを超えており、庁舎西側端部の屋外の観測地点での雪消えは5月2日でした。



写真05 竹沢：公営住宅での積雪状況
（撮影：2011年1月20日；山古志サテライト・井上洋氏）

2階建程度の切妻屋根で自然落雪方式の場合では、10cm程度の隣棟間隔があっても、落下場所の除雪が遅れると軒先まで堆雪してしまいます。屋根雪と連続すると危険になります。

雪の落下場所の排雪に工夫が必要です、竹沢の公営住宅団地の周囲は斜面ですが、そこへ定期的に排雪する方法などで解決の方向が見えると考えられます。筆者は山古志地域での41cm前後の豪雪には注目していまし



写真06 竹沢：公営住宅での積雪状況
(撮影：2011年1月25日；山古志サテライト・井上洋氏)

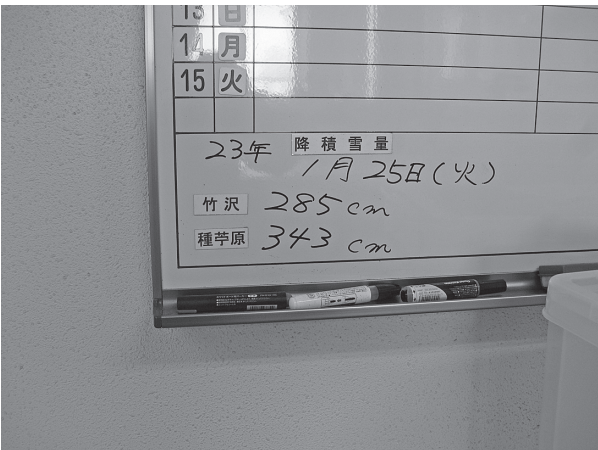


写真07 山古志サテライト：降・積雪量表示
(撮影：2011年1月25日；山古志サテライト・井上洋氏)

た、2004年度冬期の豪雪は2005年2月末に小千谷市で体験しました。その後2006年度から2009年度の各冬期は驚くような雪ではなかったのもまさに6年振りだとも思います。このように連続しない場合もありますが、この「豪雪」という特徴は交流上の要素にもなると考えられます。積雪は厳しい条件ではあるものの、その環境のなかで暮らしを組み立てている点を「発信する」冬の交流を期待します。スキー人気が下火になっている現在、「遊び」の要素は少ないものの、小動物観察、雪の風景、雪国の暮らし方体験（雪かき、道つけ、ごみステーション当番等の冬作業がある）などをメニューに組み、「豪雪・多雪・雪国の暮らし方」をテーマにした

ものは、交流上でもポイントになると考えています。気象条件の突然の変化などで、20cm以上の積雪がある場合などは、臨時的動ける下地を用意する方法も検討に値すると思います、その際には前年度の気候や積雪深などの報告資料が役に立つと考えます。

NPO法人：水環境技術研究会や日本雪氷学会北信越支部などの主催で、毎年春4月に「今年の雪速報会」が開催されています。2010年度冬期（平成23年）分は東日本大震災の影響で6月2日に開催されました。観測結果、気候の特徴、積雪深分布の報告、道路除雪の報告、雪崩に関する報告などが行われ、詳細は速報会の配布資料によります。以前に参加したことがある筆者は当日参加できなくて配布資料を送っていただきました。それをおさらいして大雑把に記述しますと、積雪深分布では2005年度冬期（平成18年）豪雪に比べて東西に長く連続して分布し「津川地区」も豪雪でした。月別の特徴は①12月中旬まで積雪はほとんど無かった。②1月には低温となり積雪深が急速に増加した。③2月は高温で積雪が減少したが下旬にはスキー場で雪崩が発生した。④3月は低温で融雪が進まなかった、また中旬には2度に及ぶ地震発生があったので雪崩パトロールを強化した。低温による大積雪深、気温上昇での雪崩、気温下降での融雪遅れ、地震等による雪崩の誘発など、気の休まらない冬期であったと考えられました。雪は春になれば融けて無くなり当時の積雪状況がウソのようになります、冬の降雪時には先読みが難しくまさに格闘でした、次年度の冬期には少しでも早く先手を打つ為にもこの速報会は有効なものと考えられます。

3-4) 山古志の山や川の名称など

山古志地域は距離的には南北で約9km東西で約7kmに広がっており、総面積は39.83km² (3,983ha) です。特徴のある山や川が展開し、地域全体のほとんどが傾斜地で、山頂から谷底まで階段状に整備された農地（棚田等）が広がっています。2011年10月現在、この地域の位置を大まかに表現すれば、「北」に長岡市及び長岡市栃尾地域、「東」に魚沼市、「南」に魚沼市と小千谷市、

「西」に小千谷市という位置になります。そして魚沼市を通る魚野川は信濃川に合流して、さらに小千谷市、長岡市へと流れています。この地形等の把握の為に「旧山古志村地形図」などから山や川の名称等をピックアップしてそのイメージを概観します。

「山」は長岡市に近い①猿倉岳（標高679.6_{メートル}）、魚沼市に近い②尖山（標高594_{メートル}）、小千谷市に近い③金倉山（標高581.4_{メートル}）がそびえ、以下 ④三ツ峰山（標高521.1_{メートル}）、⑤城山（標高508.6_{メートル}）、⑥四方拝山（標高470_{メートル}）、⑦焼山（標高444.4_{メートル}）、⑧羽黒山（標高444.0_{メートル}）、と続きます。「河川」とされているものを「川」として記載しますと、01)和田川 [萱峠付近を源として、延長14,747_{メートル}、破間川（あぶるまがわ）へ合流、それが魚野川へ合流]、02)芋川 [猿倉岳付近を源として、延長14,100_{メートル}、魚野川へ合流]、03)朝日川 [三ツ峰山付近を源として、延長8,000_{メートル}、信濃川へ合流]があります、以下 前沢川 [延長2,300_{メートル}、芋川へ合流]、油夫川 [延長1,200_{メートル}、朝日川へ合流]、七滝川 [延長1,000_{メートル}、朝日川へ合流]などがあります、山古志地域内に限定した延長は以上の数字より短い場合もあります。これら以外の川の名称は記載を省略していますが、多数の流れが信濃川流域として構成されています。山古志の山の場合「山古志八山」として、同じく川の場合は「山古志三川」として、それぞれを銘記して来訪者へ伝えたい名称です。なお地域には「長岡東山山本山県立自然公園」が猿倉岳一帯、金倉山一帯、尖山・城山・四方拝山一帯の3ヶ所に分散して展開しています。『1998,新潟の里山』¹⁰⁾には金倉山が棚田の写真撮影上のビューポイントとしても紹介されています。2008年6月、この金倉山の8合目にあたる金倉山駐車場で、山古志で研究合宿したメンバーは筆者も含め、北西方向に広がる信濃川周囲の風景を体感しました。午後の時間帯だったので逆光でしたが、午前の順光であればより明瞭にその風景が見えたと思われました。絵本『2010,ちくまがわ・しなのがわ』¹¹⁾ここにも、やまこし（山古志）、かなぐらやま（金倉山）、いもかわ（芋川）などが、絵地図と共に紹介されています。作者の丹念な描画によって子供だけでなく大人にも有効な内

容で、JR長岡駅や小千谷駅も見開きで読み取ることができ、相互の位置関係が一目瞭然でわかります。地域内の河川に関して、例えば芋川では40年～30年位前は、ここで泳いだという人達も相当いました。道路や通路から水面までの距離は相当あったとおもいますが、小学校に水泳プールのない時代では、夏になれば川での「泳ぎや遊び」が盛んだった模様です。現在でも冬の雪崩の心配のない季節には、「山と川」でのレクリエーションはかなり有望なものと考えられます。

以上は、部分的な細目の事例報告でしたが、「地元の生活文化」を構成しているものです。これらは、地元の宝物のいちぶでもあると考えられました。地元には宝物が多数あります、現在その掘り起こしは行われていますが、交流のなかに「地元の宝物や生活文化（の遺産など）を磨く」ことを含めると、地域での暮らしが生き生きすると考えられました。以上のことをまとめると、山古志での交流は地元宝物の分野において「生活文化を発信するもの」といえます。筆者はこれらの特徴を示す類型として、類型Ⅱ：地元の生活文化発信型（交流）であると考えます。

3. 復興の経験交流型（交流）

山古志での交流においては、新潟県中越地震による被災後の復旧・復興過程の経験も大きな要素であると筆者は考えます。同時にこの経験は、中山間農業地域での地盤災害からの復興という点からも大きな特徴の類型を構成しています。「復興の経験交流」に関して、被災地間の交流事例と考えられる事例、1) 東京都三宅村、2) 宮城県南三陸町、3) 宮城県石巻市雄勝町を代表として概観し報告します。聞き取りと地元の新潟日報の記事を中心とした経緯等の後読みによって内容を把握していますので、記事については日付だけの表現とされています。またその交流の内容には、支援や視察の事例も含めています。この代表例以外にも、ほかの地区等から山古志地域を視察したり交流した事例もありま

したが本章では割愛しました。

2-1) 東京都三宅村との交流

2011年10月1日（土）、山古志サテライトに照会したところ、『三宅島の田んぼ』で9月29日（木）に稲刈りが行われました。当日は晴天にめぐまれ暑いくらいの陽気でしたが、約15人ほどで午前と午後にわたって進められたそうです。この稲刈りのあと、乾燥等の作業に移り、その後三宅島に送られる予定です。当日の稲刈り作業が無事終了したことが画期的なことです。

これよりさかのぼった、2011年6月10日（金）付け記事によれば、「三宅島（東京都三宅村）と交流を続ける長岡市山古志地域の住民が地元『三宅島の田んぼ』を造り、8日に看板を取り付けた。それぞれ噴火と地震で住み慣れた土地を離れ、避難生活を経験した者同士。秋に収穫する新米は、水田のない三宅島に送り絆を深める。」とあり、さらに続けて「中越地震直後、旧山古志村に2000年夏の噴火で本州に避難中の平野祐康・三宅村長らが激励に訪れ、交流が始まった。2009年夏には山古志の中学生や住民ら約30人が三宅島を訪問。島に水田がないと知り『山古志のお米を食べてもらおう』と提案した。水田は約13㍍。中越地震の災害残土を盛った山古志地域の土地を昨年整地した。5月末に田植えし、600^{キロ}の収穫を目指している。（以下略）」とありました。この田んぼは油夫集落からみて油夫川の対岸にあり、下流の山中集落寄りにあります。2010年秋に有志が草刈りを行い田んぼに渡る橋を架け、水田用の土を客土して粗耕起して準備したものです。当時の毎日新聞：2010年10月8日付け記事には、準備を進める元山古志支所長の青木勝さんの談話が紹介されています。「三宅島の人には被災直後、いち早く駆けつけてもらい励まされた。コメを通じて生活文化がつながり合い、息の長い被災地連携をしていければ」とありました。三宅島（東京都三宅村）は2000年6・7・8月の噴火で全島避難。旧山古志村は2004年10月の新潟県中越地震で全村避難。それぞれ厳しい避難生活を経て帰島・帰村し、復旧・復興の経験があります。交流上では、「（復興）

まちづくりの経験交流」や「双方の物産交流、産消提携」にも展開することが期待される事例です。なお2011年11月30日（水）付け記事によれば、山古志地域で育てた新米16袋を三宅村へ送る出発式が、29日支所前で行われました。30日には住民が東京で三宅村長らにコシヒカリ480kgを贈呈する予定。そして来春には三宅島の子どもたちの田植え体験を実現させたいとの報道がありました。



写真08 三宅島の田んぼ；稲刈り前（撮影：2011年9月）

2-2) 宮城県南三陸町への支援

支援活動をおおむね各月ごとに記述します。＊3月；2011年3月15日（火）付けの記事、「山古志地域の住民らでつくる山古志住民会議と各集落区長による区長会は14日、被災地へ支援物資を送ることを決めた。『中越地震で世話になった人たちに恩返ししたい』と力を込めた決定。支援物資は、毛布、湯たんぽ、タオル、給水用のポリ袋、ガスコンロなど、（段ボール箱で）約100箱。（各集落で保管していたもの）。住民会議事務局は、『少しでも力になりたいと思う。受け入れ先が決まり次第、早急に送りたい』としている」。3月中に救援物資を3回搬送し、山古志住民会議全体会議等で『被災地支援』について、募金の件も含めて協議した模様です。＊4月；2011年4月7日（木）付けの記事、「長岡市山古志地域種芋原集落の住民達が、6日南三陸町の避難所に、コメと餅などを届けた」とあります。住民によれば「息長

く支援を続けていく」とのコメントでした。いわゆる山古志からの恩返しで、救援物資搬送の4回目となりました。2011年4月26日（火）～28日（木）、山古志住民会議のメンバーが、南三陸町内の避難所を慰問して、応援メッセージと募金を贈呈また救援物資搬送の5回目を行いました。＊5月；関連の支援として、長岡市内の避難所で福島県民への炊き出し慰問を実施しました、4月からの通算では4回目になりました。＊6月；南三陸町で、炊き出し慰問を実施。＊7月；農家レストラン「多菜田」から、店舗内募金箱からの義援金が送金されました。＊8月；2011年8月26日（金）付けの記事、「長岡建築協同組合（長岡市）では、仕事道具を失った大工仲間を支援しようと、電動のこぎり、かんな、のみ、などの大工道具トラック2台分を25日に積み込み、29日に宮城県南三陸町の建築関係者へ届ける予定としている」との報道がありました。その日の搬送後、同町の大工さん達との懇話会を予定し、その席で「地元の大工が協力して仕事を受注した事例を紹介したい（同組合）」としています。総勢6人で、8月29・30日（月・火）の日程で搬送、同行した人のコメントによれば、「大工道具には感謝されたが、被災後まだ半年ということもあり協同による仕事の受注等についてはこれから検討に入る状態、瓦礫等の片付けがまだあり、大工さん個人と建主個人との相談・協議がようやく始まった段階にあるので、大工さん同士の連絡調整もあることから今後の課題としている」とのことでした。＊9月；9月1日～20日の期間、山古志会館の「つなごう山古志の心展」の特別展示として、『東日本大震災支援パネル展示』を行ない、それまでの支援活動内容を写真パネルで報告しました。

2-3) 宮城県石巻市雄勝町からの視察

2011年9月9日（金）付け記事、「石巻市雄勝町名振集落の地区会長の大和久男さん（56）は、集落の役員と共に、2011年7月と8月の2回、中越地震で集団移転などをした長岡市の山間地を視察に訪れた」とありました。また「名振集落内の高台の畑地を移転候補地に選

んで地権者交渉も終え、集落再建を目指すため、中越の例を参考にして動きだした。」とありました。震災前92戸だった、ものの残ったのは津波を免れた15戸と仮設に入居した28戸だけで戸数は半分以下になった模様です。「中越の例を参考にした」ということで、この視察を後読みしました。7月26日（火）の視察は、新潟県新発田振興局建築課長：渡辺 斉氏（元長岡市復興管理監）が企画して、山古志地域を長岡市山古志支所の職員と共に案内したものです。視察の一行は、東北大学の先生方を始めとして名振集落の地区会長・大和さんを含む約15名ほどだったそうです。「竹沢・復興公営住宅団地」などを中心として地域内の復旧・復興の状況を視察しました。8月5・6日（金・土）の視察は、7月26日の視察をふまえ、雄勝総合支所から長岡市地域振興戦略部への連絡・照会をへて実現しました。5日は長岡市都市計画課の説明と案内で、防災集団移転促進事業による、長岡市浦瀬地区の宅地規模12戸の「浦瀬団地」を視察しました。同日は蓬平地区に宿泊して、翌6日は「山の暮らし再生機構(LIMO)」の説明と案内で、山古志地域内の「竹沢・復興公営住宅団地」や、小規模住宅地区等改良事業による檜木の集団移転（住宅団地）「天空の郷」などの、復旧・復興の各地点を視察しました。この2日間の視察には約27名の参加者があり、先の地区会長・大和さんも同行しています。集落再建へのなみなみならぬ熱意が感じられました。筆者としては、この視察をきっかけとして今後「復興の経験交流」が進展することを期待しています。

2-4) 視察対象の住宅・宅地の再建等

「復興の経験交流」への展開の点から視察の事例をとりあげました、その視察対象となった合併後の長岡市内の集落・団地等の一部を再建手法の面から後読みをします。住宅と宅地（住宅敷地）及び集落の住宅系再建の方法に関しては、〔福留（2011）災害発生後の集落移転〕^{（注1）}のなかで大きく次の3つ、①自力による再建、②災害復興公営住宅への入居、③集団移転による再建、に分類しています。「①自力による再建（住宅）」を除

いて若干おさらいをします、〔新潟県（2011）建築・住宅関係災害復興関連資料集成及びその他等〕によれば、②災害復興公営住宅は、(②-1) 一般災害の場合：災害公営住宅（公営住宅法第8条）と、(②-2) 激甚災害の場合：罹災者公営住宅（激甚法第22条）とがあります。住宅の罹災証明が「全壊」の場合には罹災者公営住宅への入居、「大規模半壊」以下の場合には災害公営住宅への入居となります。旧山古志村での罹災者公営住宅は、3ヶ所・9棟・19戸で、内訳は竹沢（4棟・10戸）、桂谷（2棟・4戸）、種苧原（3棟・5戸）となっていて、平成18年度の建設（事業）でした。③集団移転の事業手法は、(③-1) 防災集団移転促進事業と、(③-2) 小規模住宅地区等改良事業とがあり、各事業の詳細は事業関係資料に解説がありますので割愛し、2005（平成17）年現在の各事業のポイントを記述します。「(③-1) 防集移転事業」は、「防災のための集団移転促進事業に係る国の財政上の特別措置等に関する法律（昭和47）」に基づくもので、集団移転促進事業計画を定めることにより、従前地に危険が生じることのないよう建築規制が行われます（したがって従前地には住宅は建てられない）。移転先の住宅団地の最低規模は10戸以上等ですが、新潟県中越地震に係る地域については5戸以上とする等の特例がなされました（平成17年度拡充措置）。国の補助率は3/4の高率でその対象は、*①住宅団地の用地取得造成、*②移転者の住宅建設・土地購入に対する補助（借入金の利子相当額）、*③住宅団地の公共施設・共同作業所等の施設整備、*④移転者の住居の移転に対して、*⑤移転促進区域内の農地等の買取、などとなっています。

2011年10月に「防集移転」の事例である長岡市浦瀬地区の「浦瀬団地」を見学しました。市立浦瀬小学校の南側にあります、区域面積は約7,000㎡、12区画の宅地および公園となっています、平場での造成ということもあり一宅地は概ね300㎡程度でした、「高床式」ではない10戸の住宅は、周囲にある新築の住宅群とほとんど変わらない佇まいを示していました。



写真09 長岡市「浦瀬団地」（撮影：2011年10月）

「(③-2) 小住等改良事業」は、「小規模住宅地区等改良事業制度要綱（平成9年住宅局長通達、平成20年改正：空き家再生等）」に基づくもので、法律に基づくものでないことから収用事業ではなく、従前地の利用に建築規制は行われません。対象地区の要件は、「不良住宅戸数15戸以上で不良住宅率が50%以上」です。この事業での国の補助率は概ね1/2で、補助の対象は、*①不良住宅の買取・除却、*②小規模改良住宅整備（補助率2/3）、*③用地取得、*④公共施設・地区施設整備、などとなっています。また〔澤田（2011）集落の再生〕^(注2)において、中越地方の集落の再生と集団移転について詳細な事例等の報告がありました。以上を再確認して山古志地域での集団移転の事例、(1) 竹沢・復興公営住宅団地、(2) 榑木・池谷「天空の郷」、(3) 木簗・移転集落、の3ヶ所の団地（一団の土地）を後読みします。その結果は、(1)「竹沢・復興公営住宅団地」*敷地は旧竹沢小学校跡地、*区域面積：約7,300㎡、*建物：◎罹災者公営住宅：10戸・4棟（内訳は4戸型・1棟、2戸型・3棟）。以上は2006年度建設、同年度入居。◎低床式中山間地型モデル住宅 1戸・1棟、◎高床式中山間地型モデル住宅 1戸・1棟。モデル住宅は2007年度建設事業。(2)「榑木・池谷（住宅団地）天空の郷」*敷地は旧池谷小学校跡地、*区域面積：約14,000㎡、*小規模住宅地区等改良事業の活用、*建物：◎小規模改良住宅（公的賃貸住宅）：3戸・2棟（内訳は2戸型・1棟、1戸型・1棟）。

2007年度建設、同年度入居。◎自立再建型住宅：12戸・12棟、◎その他型住宅：1戸・1棟。(3)「木簾・(住宅団地型)移転集落」*敷地は新規造成地、*区域面積(関連の敷地を含む)：約17,000㎡、*小規模住宅地区等改良事業の活用、*建物；◎小規模改良住宅(公的賃貸住宅)：4戸・2棟(内訳は2戸型・2棟)。2007年度建設、同年度入居。◎自立再建型住宅：6戸・6棟となっています。筆者は2011年9月に上記の3ヶ所の団地内を再度見学しました、その時の印象では*区域内の清掃状況、*花壇等の手入れ状況、などから団地の維持は順調に行われている模様でした。

罹災者公営住宅や小規模改良住宅の報告に関連した地域内の公営住宅は、先の3ヶ所の団地のほか6ヶ所

あり、合わせて9ヶ所でその概要は「■表4」のとおりです。その管理は2011年度から支所市民生活課福祉係の所管となっています。

以上は、3市町村との復興の経験交流の事例及び長岡市内の視察対象となった「再建された住宅団地」に関しての、再建手法の後読みも含めた報告です。「後読み部分」は冗長になった印象もありますが、まとまった形で記録を残して置きたい、という筆者の思いがありましたので写真も4点添付しました。以上の交流の特徴を示す類型は、類型Ⅲ；復興の経験交流型(交流)であると考えられます。



写真10 竹沢・復興公営住宅 (撮影：2011年9月)



写真12 楢木「天空の郷」花壇 (撮影：2011年9月)



写真11 楢木「天空の郷」 (撮影：2011年9月)



写真13 木簾・移転集落内 改良住宅 (撮影：2011年9月)

■表4 山古志地域公営住宅団地一覧（9ヶ所）

団地名	公営住宅の概要	
①種苧原	5戸・3棟（罹災者公営住宅）	*
②竹沢	10戸・4棟（罹災者公営住宅）	*
	低床式中山間地型モデル住宅 1戸・1棟	*
	高床式中山間地型モデル住宅 1戸・1棟	*
③桂谷	4戸・2棟（罹災者公営住宅）	*
④油夫	2戸・1棟（小規模改良住宅）	
⑤梶金	2戸・2棟（小規模改良住宅）	
⑥木簞	4戸・2棟（小規模改良住宅） （集落移転：小規模住宅地区等改良事業）	
⑦木簞袖	2戸・1棟（小規模改良住宅）	
⑧大久保	3戸・1棟（小規模改良住宅）	
⑨檜木	3戸・2棟（小規模改良住宅） （天空の郷：小規模住宅地区等改良事業）	
（合計）	35戸・18棟 （他にモデル住宅：2戸・2棟）	

・（2008年の山古志支所公営住宅一覧をもとに筆者作製）
・（*印は2006年度事業を示し、その他は2007年度事業）

4. 交流の今後の進展

山古志地域での交流の特徴を類型に分類して整理すると現時点では、Ⅰ：観光・観光交流・融合型（交流）。Ⅱ：地元の生活文化発信型（交流）。Ⅲ：復興の経験交流型（交流）の3種類であると筆者は考えています。その特徴の概要はここまでの各章で概観した内容です。今後この種の類型は追加することも可能であると考えています、本章では交流の今後の進展を記述します。

◎第一の類型Ⅰ：「観光・観光交流・融合型」交流の今後の進展について進めます。観光と交流は別物で違う概念であることは承知していますが、現地でその活動の展開を観察した結果、観光や観光活動にも交流が存在し観光交流及び交流活動にも観光や観光対象が含まれていることから、これらが混然一体的に融合していると言えます。それは地元の農業などの産業をベースとしている「産業・観光」が基になっていることによると考えられます。筆者は観光関係者からの直接的な聞き取りは出来ませんでした、間接的にヒアリングしたことから考察すると、漁村に比べ農村では余暇活動において「遊び（プレイ）」の要素が少なく、収穫や採集

及びその前段の植え付けなどがその特色です。従って地元でヒアリングした、「ツリーハウス」のようにその場所にある事物などを利用した「遊びの要素」を加味した農村体験が、今後も有効と考えられました。

この類型の分野での進展では、実行者である地元住民の意向は重視されます。被災後から始まった「教育体験修学旅行等」は継続していくこと、来訪者に人気のあった「地域案内ガイド」・「山古志弁当」などは継続していくとのお話を聞きました。売り上げ高などの数字的なものは把握していませんが、これらは大掛かりな「交流ビジネス」の方向ではないと考えられます。しかし実行に当たり、時代変化等への対応も必要なので「アンケート調査、部分的ヒアリング」などで来訪者の意向を集計して、動向を把握することを期待しています。筆者のアイデアですが、応急仮設住宅に住んでいた時代の「いきがい健康農園」の延長で、それに近いものを山古志地域で再開して、共同で栽培を行う農園方式が考えられました。その内容には花の栽培も含め、例えば食用菊である「カキノモト」なども含めた作目と地域外からの来訪者向け栽培地を含める事にも検討を期待します。さらに山の暮らし体験と地域の新たな交流拠点の場としての「（仮称）やまこし復興交流館」及び養鯉業振興に寄与する「錦鯉展示施設」の完成が期待されます。

◎第二の類型Ⅱ：「地元の生活文化発信型交流」の今後の進展について進めます。この生活文化領域での項目は多岐にわたっていることと、第2章でも若干記述していますので部分的な言及までとします。新潟日報の2011年12月8日記事によれば、「12月4日（日）、長岡市内の和太鼓愛好団体が共演する『越後長岡・和太鼓祭』が、ハイブ長岡で開催されました。5,000人余りの入場者があったそうです。主催：とっておきの長岡『和太鼓の会』です。演奏者は幼児から70歳代までの約550人25団体が参加しました。『三島かたくり太鼓』が初参加して、旧市と10の合併地域の団体がそろいました。この祭りでは太鼓体験会や、長岡の山海の幸を使った『和太鼓鍋』の出店もあったそうです」。山古志太鼓会の参

加もあった模様で、「■表2」の2010年度と同時期での開催です。約5,000人を前にした演奏で強い自信が生まれたのではないかと想像しました。このような「創作和太鼓・演奏」は人気の活動であることから、時間等の余裕があれば地域外での交流活動となり、他流試合を経て地域からの元気の発信につながると考えられました。この過程（プロセス）等をさらに広報することで活動に好循環が生まれると期待されます。

「山菜等の栽培」に関して若干補足します。栽培については現在進行しており実績があることは認識されました、現在以上に資源枯渇を防止する方向で推進することを期待します。このように地域では多彩な「栽培の技術」が存在していますので、これらも地元の宝物といえます。従ってこの推進に際しては他地域の住民に、その栽培技術を仲立ちとして「技術交流」する方向での展開が考えられました。その際「栽培メモ」などの記録も非常に有効で、このような記録を利用した交流も期待されます。

◎第三の類型Ⅲ：「復興の経験交流」の今後の進展について進めます。復興の要点は、その過程にあるとも考えられます。2004年10月23日の新潟県中越地震の発生、それ以降2011年10月の現在に到る過程で、「全村避難、避難所生活、応急仮設住宅での生活など」を経て2007年12月には帰村式を行うまでになり、その後も復旧・復興が進みました。山古志地域でも、被災以降現在までの過程が地域での生活の復興過程と考えられます。個人個人の被災体験や復興経験、地域での社会基盤や農地等を中心とした生産基盤の復旧、その後の生活や生業の復興過程がその経験であり、構造物も含めた地域全体が復旧・復興経験の集合体でもあります。このことは「地域全体が復興経験の博物館である」というのも過言ではありません。「■表5」は1989年以降の主な地震災害等を一覧としたものです、2005年以降も大きな災害が断続的に続きました。このほかに台風による風害や水害及びその他の災害がありました。甚大な被害を受けた人々には慎んでお見舞い申し上げます。気持ちの区切りをつけて被害からの再生をめざして再出

発する時、従前の災害からの蓄積や再生過程及び復興過程は指針になります。そのような点からも、経験の交流は被害を乗り越える一助であり糧でもあると筆者は考えています。次々に発生する災害に対してはその対応も進化しています。新潟県中越地方では、2011年10月現在で被災後7年が経過していることや山古志地域内での生活の安定状態から、報道機関の一部では「復興した山古志」という表現も使われ、復興の仕上げの

■表5 （1989・平成元年以降）国内の主な地震災害等

西暦年等	主な地震災害等
1989年 (平成元年)	(関東・東海地方) 群発地震 (7月9日)
1990年	雲仙・普賢岳噴火 (11月17日)
1991年	雲仙・普賢岳火砕流発生 (6月3日)
1992年	
1993年	北海道南西沖地震発生 (7月12日)
1994年	三陸はるか沖地震発生 (12月28日)
1995年 (平成7年)	阪神・淡路大震災発生 (1月17日)
1996年	
1997年	
1998年	
1999年	
2000年 (平成12年)	北海道・有珠山噴火 (3月31日) 東京都・三宅島噴火 (6月26日,一度目) (7月8日,二度目) (8月10日,三度目,全島避難) 鳥取県西部地震発生 (10月6日)
2001年	芸予地震発生 (3月24日)
2002年	
2003年	宮城県北部地震発生 (7月26日)
2004年 (平成16年)	新潟県中越地震発生 (10月23日)
2005年	福岡県北西沖地震発生 (3月20日) 宮城県沖地震発生 (8月16日)
2006年	
2007年	能登半島地震発生 (3月25日) 新潟県中越沖地震発生 (7月16日)
2008年	岩手・宮城内陸地震発生 (6月14日)
2009年 (平成21年)	
2010年	
2011年 (平成23年)	東日本大震災発生 (3月11日) 長野県北部地震発生 (3月12日)

(2008「地震・噴火災害全史」日外アソシエーツを基に筆者が作製)

時期に入ったという表現も聞かれます。以上のような背景のなかで、3月11日に発生した東日本大震災の被災地等への山古志住民による支援活動も含めた「復興の経験交流」が展開されています。「地域での復興まちづくり」の経験交流型交流ともいえます。

2011年秋までのところ、集団移転や再建住宅に関しての実施計画やその完成状況及び供用・運営状況について被災地からの視察が続いています。今後の交流の進展では、山古志住民自身の生活復興過程や産業振興過程の取り組みの経験及び「帰ろうー山古志へ」という強い気持ちで復興に取り組んだ事を伝える交流の推進を希望します。

以下においては、各類型に共通する「交流全体の今後の進展」に関して記述を進めます。始めに「復興まちづくりの面」を取り上げます。筆者は「産業振興上での交流」を考えた場合、調査研究の当初はその直接的な経済的効果の増進をイメージし、それに対応した事業の模索を行っていました。復興まちづくり上、復旧・復興過程の仕上げ段階にある現在では観光以外の交流関連ビジネスは概ね「副業的」な範囲にとどまっている状態と考えられました。これは地元の意向もあると考えられました。しかし交流ビジネスを含めた広い範囲におよぶ交流を把握した場合には、地域運営や地域まちづくり活動（地域での生活の質の向上を目的とする活動）に少なからず影響を与えています。その影響とは、「地域住民の元気取り戻し」に関するものです。詳細な分析等は今後の課題ですが、事例の観察と部分的な聞き取りによるその活動内容を記述すれば①学生ボランティアによる集落活動の支援。②地域外住民等による農業応援等。③地域イベント参加者による地域応援等などがあり、元気取り戻しに向けた活気の醸成に大きな影響を与えています。筆者はこれらの影響を地域のまちづくり上で、コミュニティの弱体化防止になっていると見ています。来訪者との交流活動によって地域運営推進の助けになる事、地域での暮らしの励みや張合いになる事、地域応援を受けて地元価値や地元再発見する事などの機会や契機が発生します。以上

のことを総合して表現すれば、「産業振興の基盤に影響を与え、その基盤を強固にすることを推進する」交流と考えられます。簡潔に表現すれば、交流による間接的な地域運営への効果と言えます。今後の進展では、交流の推進が地域運営推進の効果につながります。次に、「経済活動の面」を取り上げます。観光以外の交流関連ビジネスは概ね「副業的」な範囲にとどまっている状態ですので、ほどほどの効果と考えられました。最後に、「社会的な現象面」を取り上げます。筆者の理解では、交流活動全体がさまざまな形で地域の復興である「元気取り戻し」に影響や「活気」の醸成に契機を与えていることから、このことは社会全体からの支援、いいかえれば社会的支援であると考えられました。

支援は循環します、同時に災害対応は進化します、「表5」は地震災害等を時系列に一覧としています、それぞれの災害を思い起こすと対応内容は実際に進化しました。進化と共に「恩返しエネルギー」が次の支援に繋がっているという側面が社会的支援にはあると考えられました。この社会的支援に関連した事例として「仮設住宅と付属農園」に関して若干記述します。

〔農林水産政策研究所（2011/10/4）研究成果総論〕¹²⁾においても旧山古志村「いきがい健康農園,2005」の概要が紹介されています、同時に三宅島の「げんき農場,2001」と「ゆめ農園,2002」も紹介されています。それぞれ避難先の八王子市（約30,000㎡）と江東区（約25,000㎡）で開設されました、「農業再開をスムーズにする」のが主な狙いです。自己所有地以外で農園として利用できる用地を確保した事とその後も農地利用が出来たことが画期的なことだったと筆者は考えています。〔飯塚（2011/10/12）：論文〕¹³⁾で同様の事例が『千葉県旭市飯岡地区の自給菜園』として紹介されています。特色は①耕作されていない農地が（利用上）開放された事。②その農地（約1,000㎡）の約2/3が共同地、残りが個人用に割振られた事。③その他となっています。仮設住宅住まい者のなかに『土いじりがしたい』という要望があったこともポイントだったと考えられました。この論文は、「社会的支援」を具体的に示

した事例でもあったと考えられました。また交流のスタイルとして「農地と土いじり」を仲立ちとしています。この論文全体の把握にはさらに精読が必要ですが、「交流」をテーマとしている筆者が特に注目した下記部分を引用させていただきます。『農家側にとっても自分の田畑に非農家の地域住民が興味を示して話しかけてくるという状況はこれまであまりなかったようで、少しずつではあるが農業をめぐる人の交流が生まれてきている。』とあります、農地や農業が交流の仲立ちとなっていることが良く理解できました。共同利用の農地部分にも注目しました。

おわりに

◎用語的に交流は、一般に「エクスチェンジ exchange」とされています、しかし筆者には交換の意味も強い印象がありました。朝霞での研究の協議会で、「ネットワーキング networking」や「リエイション liaison」などの教示もいただきました、その後「sns 交流サイト」や辞書で検索を続け「ふれあい、共感の交流」の含意のあるものを探していたところ、「ラポート； rapport=friendly agree-ment and understanding between people」を発見しました。社会調査の分野では「人間関係の構築」の意味で使用していました。迷った末に新潟県の担当部署にも照会したところ、公文書では「exchange」を使用しているとの回答をいただきました。また非公式の場合には「friendship」、「relations」もあるとの回答で、ようやく得心しました。因みに関連して、日本語の造語である言葉「シティ・プロモーション = 都市振興、都市魅力の推進という意味に近い」との説明もいただきました。以上の事情がありましたので、使用上「交流：exchange (or rapport)」としています。

◎交流、交流活動の概念と実態の把握は、かなり難しい作業でした。概念に関しては①社会的な現象面、②経済活動の面、③復興まちづくりの面、④その他の面

があり、それぞれの面及び視点からのアプローチがあると考えられました。遅かったと思いますがこれらは調査研究の終盤に認識しました。復興まちづくりの視点からは、特に類型Ⅲの「復興の経験交流」の実態が把握でき、地域マネジメントに関する考察に到りました。社会的な現象面の視点がなかなか固まらず、まさに終盤に社会的支援という概念からの報告としました。実態の分析等が不十分な結果となりましたが、これは今後の課題と考えています。調査研究の出発では、交流事業としての経済活動面での視点に比重がかかり「再生と活性化」の方向についての模索が続きました。しかし地元の実態や意向が判明するにつれて、復興まちづくりの視点に移行して、社会的現象面での視点も定まりました。調査研究の中盤では以上の事情から、かなりの期間にわたり迷路（ラビリンス）状態が続きました。テーマの設定で当初の「産業振興上の交流」^(注3)から、最終的に「産業振興の基盤に影響する交流」というシフト（視点の変更）によって、直接的な地域経済上の効果を目指す交流ビジネスではない、間接的な地域マネジメント上の効果を目指す交流活動の推進の方向性が見えてきました。その方向での事例収集に移行し、その事例が展開上での効果や影響を示していることを報告しましたが、踏み込んだ分析が不足していたと思われました。大きな枠としての「交流の全体像」の把握に傾注した結果がその原因と考えられました。

◎この調査研究の動機は複数ありましたが、そのひとつに2004年度の『山古志村復興物語；The Revival Tale of the Yamakoshi-village』の存在がありました。これは当時建築学科3年の、鹿倉三裕、花渕勇介、尾崎佳史、黒澤麻美、亀塚清加の五人の諸君の作品で復興計画の提案です。この作品は同年度に、国際NPO；高齢化福祉社会国際協議会が主催、国連ハビタット（人間居住計画）の共催による「国際学生設計コンテスト：老人を含めた全年齢型コミュニティの計画・設計；団体の部」に応募して、最優秀賞を受賞したものです。作品・応募案は「中越地震で被災した山古志村民8世帯18人に対し、それぞれの家族用の住宅と共に、共同の居間、食堂、

村が設置する保健施設のランチなどを計画し、柔らかな共同性を保障した『コ・ハウジング』を提案した」ものです。筆者は英文による「作品：復興計画の提案」の写しを受領して閲覧することができました。新潟県内での課題に取り組んだ五人の熱意には強くうたれ県内の居住者としては、この熱意に触発されました。5年間の調査研究においては、「地域を応援すること」をその基礎に置いて進めました。

【謝辞】

福祉社会開発研究センターでの5年間に及ぶ調査研究では、新潟県の担当部署、長岡市、同山古志支所、同地域復興支援センター山古志サテライト及び調査協力の関係者の方々には大変にお世話になりました。皆様のおかげで2011年度の本稿始めとして、各年度の報告書をまとめることができました。記して感謝申し上げます。また研究の途中で急逝された故内田雄造教授には、本研究を含めて建築学科在学中から非常にお世話になりました。記して感謝申し上げますと共に慎んで御冥福をお祈り申し上げます。

【注 及び 参考文献】

(注1) <http://pdhsk.com/hukutome.pdf>

URL：(被災地市民交流会)，2011/09/12；アクセス。

(注2) news-sv.aij.or.jp/shien/sl/0413sawada.pdf

URL：(日本建築学会)，2011/09/13；アクセス。

(注3) 内田雄造 (2009)「山古志の素晴らしい生活を継承しよう - 山古志の地域マネジメントに関する考察 - 」、『平成21年度東洋大学福祉社会開発研究センター研究概要研究プロジェクト2』, p3-7.

01) 長岡市山古志地域ふるさと創生基金事業実行委員会編 (2011)「やまこし ふるさとガイド」, 同会。

02) 山古志村総務課編「1997 山古志村勢要覧」, 同村。

03) 山古志村写真集制作委員会編著 (2007)「ふるさと山古志に生きる」, 農山漁村文化協会。

04) 小野美恵子著 (2005)「太鼓という楽器」, 浅野太鼓文化研究所。

05) 高橋郁丸著 (2010)「新潟の妖怪」, 考古堂。p95

06) 山古志村史編集委員会編 (1983)「山古志村史・民俗」, 山古志村役場。p452-465

07) 水沢謙一著 (1978)「あつたてんがな」, 野島出版。p 111

08) 神林傳著 (1995)「山うどの人工栽培法」, 北条タイプ印刷。

09) 新津農業普及指導センター (2007)「わらび栽培マニュアル」。

10) 高澤幸雄著 (1998)「新潟の里山」, 新潟日報事業社。

11) 村松昭 (2010)「日本の川ちくまがわしなのがわ」, 偕成社

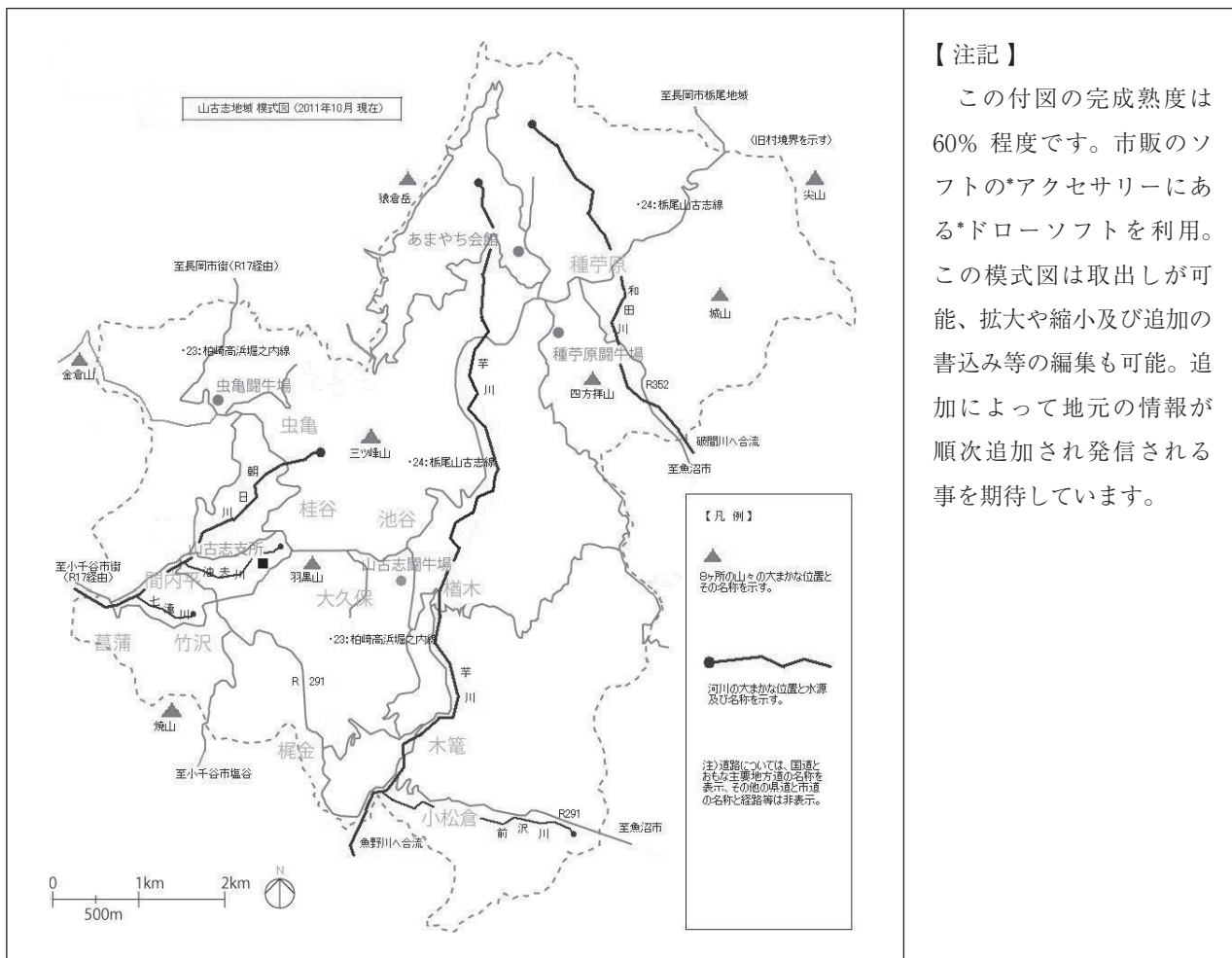
12) 農林水産政策研究所：研究成果書 (2011/10/4)「過去の復興事例等の分析による東日本大震災復興への示唆：総論」, p4-5。], PDF版。

13) 飯塚里恵子 (2011/10/12)「津波被災地仮設住宅における暮らしの再建とみんなの畑 - 千葉県旭市飯岡地区の事例から」, 『種を播こうの会 第4回研究会 資料集』。

＊) 勝瀬義仁著 (2011)「北朝霞物語」, 埼玉新聞社。

＊) 拙稿 (2011)「長岡市山古志地域での交流の試み」, 『平成23年度東洋大学福祉社会開発研究センター研究集成 研究プロジェクト2』。

■ 付図1 山古志地域の模式図 (2011年10月現在)



(2010年7月：清野 隆氏原作， 2011年11月：筆者追加記入)

A study of the exchange character in Yamakoshi, Nagaoka city -Type and progression- Shunsuke Nihei

(Abstract)

This paper reports the exchange (or rapport) character in Yamakoshi. There are three type showing the character, Harmony Type from sightseeing through rapport, Message Type of living-related culture, Experience-exchange Type of rehabilitation (on the disaster Chuetsu Earthquake). It is considered that exchange-activity contribute to the practice in the Community-Management and the exchange by many people is recognized as Social-support from the viewpoint of recovering good cheer in the community, studying each type of the exchange character. It is clarified that the key point of progression of the exchange for the future in Yamakoshi is to practice actions in the community-management and to promote circulating activities in the social-support.

(Keywords)

exchange character in Yamakoshi, community-management, social-support